



Supplementary Explanation

無痛分娩をご希望の患者さまへ

 岩田病院

〒453-0014
愛知県名古屋市中村区則武 1-1-11

TEL 052-451-1552
<https://iwata-hospital.com/>



はじめに

このリーフレットは、無痛分娩を希望される患者さまあるいは、無痛分娩に興味を持っていただいた患者さまのために作成いたしました。硬膜外麻酔の分娩に対する影響、帝王切開や吸引分娩との関係、そして、無痛分娩の副作用や合併症についてお読みいただくことで、無痛分娩に対する理解をより深めていただけるようまとめています。また、この内容に関してさらに詳しくお知りになりたい点があれば、遠慮なく担当医師にご相談ください。

岩田病院 院長 岩田浩輔

無痛分娩の副作用と合併症

現在欧米では硬膜外麻酔無痛分娩の安全性は確立しており、重い合併症が出現することは非常にまれです。このことは、欧米で硬膜外麻酔無痛分娩が積極的に行われていることからわかります。しかし、まれとはいえ、どんな医療行為にも問題となるリスクはあり、それをあらかじめご説明しておく必要があると考えています。ごく一般的な副作用として以下があります。

■血圧低下

血圧の低下を予防するため必ず点滴をしてから無痛分娩のお薬を使用しますが、それでも血圧が下がってしまうことがあります。その場合は点滴を速めたり、血圧を上げるお薬を用いたり、無痛分娩のお薬自体の量を調整します。

■かゆみ

用いるお薬によって生じるもので、アレルギーなど関係がない場合がほとんどです。

■吐気・嘔吐

妊娠そのものにより吐気・嘔吐は起きやすくなっていますが、それにお薬の反応による血圧低下などが重なって起きる場合があります。

■尿閉

尿が出にくくなることです。通常の場合もしばしばみられますが、加えて、硬膜外麻酔の影響が強くなった場合に起こります。分娩中は助産師が必要に応じて尿の介助をします。

■腰痛

出産後多くの方が腰痛を感じます。無痛分娩行った場合と行わない場合を比較してみても腰痛の発生頻度に明らかな差はないといわれています。また、1年以上腰痛が残るケースでも両者の間に明らかな差はないといわれています。

■放散痛

硬膜外麻酔の針を刺したときにピリッと電気が走ったような嫌な感覚を感じることがあります。これを放散痛といい、多くは一過性ですぐ収まるのがほとんどですが、ごくまれに数週間症状が続くことがあります。この場合でも特別な処置を必要とせず経過観察だけで収まります。

まれな、あるいは極めてまれな合併症として

■頭痛

産後(産褥期)にホルモンの影響で頭痛を訴える方が10人に2～3人はいるといわれています。それとは別に、無痛分娩をされた方の中に麻酔の合併症として頭痛を訴える方が100人に1人程度生じます。そのうち半分の方は1週間程度で自然に治りますが、残りの半分の方は激しい

頭痛のため特別な処置が必要になることがあります。処置により9割の方は劇的に症状が改善しますが、まれに症状が改善せず治療に長期間を要する場合があります。

■神経障害

分娩後に下肢や臀部にしびれが残ることがあります。無痛分娩によるものというよりは、赤ちゃんの頭で神経が圧迫されたことや、分娩時の体位が原因で起こることが多いといわれています。数週間から数ヶ月で改善されるものがほとんどで、無痛分娩の神経障害で永久的なものはまずないといわれています。

■局所麻酔薬中毒・全脊麻

いずれも正しい場所以外の血管内や硬膜内にお薬が大量に入ってしまった場合に起こります。当院ではこのことを防ぐため、正しい場所以外にお薬が入ってしまったとしても重症にならないように、ごく少量ずつ何回にもわけてお薬を注入しています。耳鳴り、金属味、口周囲のしびれ、足が動かないなどの症状がある場合はすぐにお申し出ください。お薬がごく少量の場合は、麻酔が覚めてくれば自然と症状も改善します。

■硬膜外血腫・膿瘍・髄膜炎

極めてまれですが、硬膜外腔で血液が固まってしまうたり(硬膜外血腫)、雑菌が入って膿がたまったり(膿瘍)、炎症を起こしたりすることがあります(髄膜炎)。麻痺を残してしまうことがあるため、より積極的な治療が必要です。また、不幸にして硬膜外血腫や膿瘍が起きてしまった方の多くのケースに、はじめから何らかの血液凝固異常(重症妊娠高血圧症候群、遺伝性血液凝固異常)があるといわれています。ご家族やご親戚に血液が固まらない病気の方がおられる場合は、無痛分娩を受ける前にぜひお申し出ください。

重症な合併症ほど頻度は極めてまれで、出産そのものの危険性よりはるかに低率といわれています。しかし私たちは、たとえ極めて頻度の低い合併症であっても起こらないように細心の注意を払っています。また、これらの合併症は間違いがなくても100%防止できるというものではないため、万が一発生した場合でも適切に対応できるよう準備をしていますのでご安心ください。

無痛分娩と帝王切開の関連性について

過去にはあまりに早期(あまり子宮口が開いていない状態)から無痛分娩を開始すると帝王切開が増加するといわれていました。現在では、低濃度硬膜外持続注入法が主流となったことにより、無痛分娩によって帝王切開が増加することはない、という考えが主流です。

無痛分娩が分娩時間におよぼす影響について

以前は、無痛分娩に高い濃度の麻酔薬が一般によく使われており、お薬の使用と同時に陣痛が極端に弱くなったり、分娩時間が著しく延びたりしたことがありました。最近では低濃度硬膜外持続注入法の導入により、お薬の微妙な調整が可能になったため、子宮収縮の抑制が少なくなり、分娩進行を強く妨げることがなくなりました。これにより分娩時間が大幅に延長することはほとんどなくなりました。中には無痛分娩をすることにより骨盤の緊張が取れ、より短時間に分娩が進行することさえあります。平均すると分娩時間は、無痛分娩をしない場合より無痛分娩をしたほうが少し延びるといわれています。

無痛分娩と吸引分娩に関して

無痛分娩の場合、十分に痛みを取ると分娩第2期(子宮口が全開大してから赤ちゃんが生まれるまで)が延長しやすく、結果として吸引分娩や妊婦さんのおなかを押して努責を助けたりすることが少し増えるのは事実です。そのため赤ちゃんが生まれる直前に少し痛みを感じるようなお薬の使い方をすることがあります。少し分娩第2期が延長しても赤ちゃんの状態がよく、母体が極端に疲労していなければ問題はないといわれています。

無痛分娩と分娩誘発、分娩促進、陣痛促進剤の使用に関して

当院では以下の理由(適応)で陣痛促進剤を使用することがあります。

■赤ちゃん側の理由として

- 児救命のため新生児治療を必要とする場合 絨毛膜羊膜炎
- 過期妊娠またはその予防
- 糖尿病合併妊娠 巨大児が予測される場合
- 胎児発育不全 子宮内胎児死亡
- その他、児早期娩出が必要と判断された場合

■母体側の理由として

- 微弱陣痛 前期破水
- 妊娠高血圧症候群
- 墜落分娩予防
- 妊娠継続が母体の危険を招くおそれがある場合

■その他の理由として

- 妊産婦側の希望等

無痛分娩の場合においては、やや陣痛が弱くそれにより分娩進行がおもわしくない場合(軽度の微弱陣痛ともいえる状態)、分娩進行を円滑にするためどうしても必要な場合に限って促進剤を使用します。

その頻度は無痛分娩をしなかった場合と比較してやはり増加するようです。

促進剤を使用する場合は必ず医師の説明を聞いていただき、納得同意の上で使用することが重要です。

促進剤使用の同意書も無痛分娩の同意書とは別に必要になりますので、ご協力をお願いします。



無痛分娩同意書

岩田病院長殿

私は無痛分娩の説明書をよく読み、あるいは無痛分娩の説明をよく聞きその内容および無痛分娩の実際、副作用、合併症に関してよく理解しましたので納得の上同意し、無痛分娩の実施を申し込み致します。

また、上記医療において予測されない状況が発生した場合は、それに対処する為の緊急処置をうけることも併せて同意します。

年 月 日

本人 _____

配偶者 _____

(なお配偶者の欄が空欄の場合は本人の意思を尊重いたします)